The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 上平貢氏のご逝去を悼んで/上平貢先生のご経歴およびご業績/上平先生の思い出 |
| Author(s) | 藤田, 治彦 |
| Citation | デザイン理論. 2013, 61, p. 1-4 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53383 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 上平貢氏のご逝去を悼んで

藤　田　治　彦

意匠学会第５代会長上平貢氏は2012年９月30日に他界された。京都市立芸術大学，京都工芸繊維大学でおもに美学や美術史を教え，引き続き，京都市美術館館長，嵯峨美術短期大学（現京都嵯峨芸術大学）学長を務められるなど，京都の大学や美術館を拠点に長く活躍された。京都市芸術文化協会の理事長，同じく京都にある文字文化研究所の所長・理事長なども歴任され，第３代会長の伊東一信氏と同じく享年87歳，ご長命であった。

故上平貢氏は，モダニズム一筋の故伊東一信氏とは対照的に，伝統の人であった。レオナルドやミケランジェロなどイタリア・ルネサンスの芸術を研究する一方で，書を愛好された，というよりも自ら書家でもあった。

京都工芸繊維大学では，ご専門の西洋美術史の講義を担当されるとともに，第２代会長河本敦夫氏の後を継いで美学講義も担当されていた。美学と芸術学との違い，またそれらと美術史学との関係等についての格調高い話に始まり，内容はいつのまにかレオナルドやミケランジェロなど，西洋美術史のほうに移って行ったと記憶している。そのような調子で美学や美術史の講義を行うとともに，理論研究者ではあるが，意匠工芸学科の一教員として，デザイン基礎実習にも加わられていた。40年も前のことなのではっきりとは憶えていないが，担当されていたのは，やはり何か書に関わる内容の課題だったように思う。

故上平貢氏は名講演家，それ以上に，ご挨拶の達人で，非常に格調の高いご挨拶を常になさっていた。今の時代，格調よりも親しみやすさや面白さを考えて話したり，挨拶したりする場合が多く，話の内容はもちろん大切なのだが，かたちをしっかりまとめないといけない時もある。そのような時には，やや格式ばっていたなとは思うが，常に気韻ある発声でご挨拶をされていた上平先生のお顔が目に浮かぶ。研究上のご専門は西洋美術史であったが，やはり書家らしく，「気韻生動」「骨法用筆」の人であったのだろうと，いまになって思う。会員の皆様とともに，意匠学会第５代会長上平貢先生のご冥福をお祈りしたい。

# 上平貢先生のご経歴およびご業績

並　木　誠　士

上平貢先生は，大正14年（1925）８月20日広島県にお生まれになりました。

昭和26年（1951）３月に京都大学文学部を卒業され，京都大学助手，京都市立美術大学講師，同大学助教授を経て，昭和43年に京都工芸繊維大学助教授に転任され，その後，京都工芸繊維大学教授を経て，同大学定年と同時に名誉教授となられました。この間，京都大学，大阪大学，東北大学，神戸大学，岡山大学などでも教鞭をとられました。

平成元年（1989）４月には宝塚造形芸術大学教授，平成６年４月から平成13年３月までは，嵯峨美術短期大学学長の重責を担われました。また，平成元年５月からは京都市美術館館長を兼務されました。

私ども意匠学会では，早く昭和43年より委員をつとめられ，平成２年には意匠学会副会長，平成３年からは第５代意匠学会会長となられて，学会の発展に大きく寄与されました。そのほか，昭和50年より平成７年まで美学会委員，昭和51年より平成７年まで美術史学会委員をつとめ，デザイン研究，美学美術史学研究の基盤確立に尽力をされました。

国，京都府，京都市などの芸術文化にかかわるさまざまな要職も歴任されました。その一端をあげれば，総理府京都和風迎賓施設調査検討委員，京都国立近代美術館評議員，京都国立博物館評議員，学術審議会専門委員（美術史），94年世界博物館・美術館京都会議日本側ホスト美術館長代表，京都市姉妹都市協議会フィレンツェ委員，京都市芸術文化協会理事長，京都市文化功労者選考委員，京都市芸術文化協会選抜展選考委員，京都市立芸術大学芸術振興基金財団理事，京都市芸術文化政策策定委員，京都府美術工芸展審査委員など枚挙にいとまありません。なお，これらの功績を称えて平成14年秋の褒章で勲三等瑞宝章が授章されました。

先生のご専門は，フィレンツェ美術を中心としたイタリア・ルネサンス美術史であり，多くの学術論文を世に問われるとともに，『フィレンツェの壁画 ── 保存と発見 ──』（岩崎美術社，1973），『レオナルドと彫刻』（岩崎美術社，1977），『大系世界の美術12　ゴシック美術』（共著，学習研究社，1979），『世界美術全集２　レオナルド／ラファエルロ』（共著，小学館，1978）などの著書や翻訳も刊行され，西洋美術史研究を牽引されてきました。

また，昭和58年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）「芸術とデザイン ── その統合と乖離 ──」昭和62年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）「美術史におけるデザイン史」の代表者として，デザインを巡る総合的研究を進められました。

ここに先生のご冥福をお祈りいたします。

# 上平先生の思い出

島　先　京　一

上平先生の訃報を知らされた時，私は私の人生の大きな宿題をついに果たせなかったことを知らされました。それは，研究者として小さくてもよいからまとまった成果をものにし，先生の学恩に報いることでした。私にとって上平先生は，何といっても学問の師匠でした。

京都工芸繊維大学意匠工芸学科に入学し学んだ同窓の大半は，将来の活動をデザインの実践の場に求めていたこともあり，現役の学生時代には上平先生の講義に対して授業以上の感想はもっていなかったかもしれませんが，私は違いました。２年生の時に受講した先生の「美学」は，あまり実技系の科目が得意ではなかった私にとって，毎回のように知的な興奮をもたらしてくれる刺激的な時間でした。先生の「美学」は，先生があらかじめ用意された講義ノートをゆっくり朗読され，それを私たちが忠実にノートに記し，そして先生の解説を伺うという，中世のヨーロッパの大学から脈々と引き継がれてきたに違いない，伝統的な方法を踏襲されていました。研究者としての入門段階以前にあった私が先生からいただいた最初の教えは，伝統に対する敬意だったように思います。

他の同級生たちとは異なり，作品制作ではなく研究論文での卒業を希望した私に対して最初に上平先生からいただいた課題は，研究の基本資料となる洋書の文献を読み通すことでした。ピート・モンドリアンの画業に関する研究に着手しようとしていた私に先生は，ミッシェル・スーフォール Michel Seuphor によるモンドリアンの伝記的研究，“Piet Mondrian Life and Works”と，ハンス・L・C・ヤッフェ Hans L. C. Jaffe の“De Stijl 1917–1931”の２冊をお示しになり，とにかくまずはこの２冊を読み切るようにとのご指示を下さいました。当時の私は英語がそれほど得意ではありませんでしたので，果たしてこの苦行とも思えた課題をこなせるのだろうかと不安を覚えたものです。

西洋文化の文脈の中で形成された何かについて研究するにあたって，その文脈の中で用いられた言語で書かれた文献をまずは参照しなければならないことは，研究者にとってはごく当たり前のことです。研究の初心者であった私がこのことを当然のこととして受け入れるためには，やはり一度，まとまった成果を完成させる必要がありました。私は辞書を片手に必死の思いでこの２冊を読み終えましたが，この入門段階でのハードな体験は私に多くのものをもたらしてくれました。一つは間違いなく，研究活動に従事するにあたって必須の研究体力，忍耐力です。そしてさらに現在の私の研究にとって重要な意味をもつことになったのが，外国語という異なる思考のメディアを通して考えてみることの大切さでした。先生にとってはきわめて当然の指

導の一つに過ぎなかったはずですが，私にとっては全く新しい思考の世界に飛び込むためのとても大切なイニシエーションだったのです。

ゼミナールでの上平先生のご指導は，厳しいものでした。ゼミナールで発表するレポートの中に，根拠の乏しい推論を少しでももぐり込ませてしまうと，それは研究という名に値しないと，厳しく却下されました。しかしごく稀ではありましたが，着実に根拠を積み上げながら新しい知見にたどりついたレポートが発表されると，あのお厳しい先生の顔に穏やかな光が差し込み，辛口のご指導が少しばかりではありましたが，緩まれたことが思い出されます。

厳しいゼミの終了後のお酒の席での先生は，いつでもお楽しそうでした。他の講座の大学院生が宴席の噂を聞きつけて研究室にやってくると，「デザイナーは鼻が利かないといかん」と嬉しそうにおっしゃいながら，ビールやウィスキーを勧めていました。お酒の席では，お若いころのイタリアへの留学でのご苦労話を，楽しそうに話されていました。厳しい研究活動の後の宴席の楽しさも，先生からご指導いただいた，大切な人生の華の一つだったように思われます。

私の現在の研究上の関心は，意匠学からやや距離を置き，障害学と芸術学との橋渡しに移ってしまいました。しかしながら，研究者としての私の基本的な人格や体力は，上平先生から直接のご指導を頂くことができた数年間で形成されたものであることは間違いありません。ありがとうございます。安らかにお休みください。